

巻頭言

変貌する肥満研究

札幌医科大学第二内科
島本 和明

肥満研究はこの20年で大きく変わってきており、変貌の最も大きな研究分野の1つである。動脈硬化、糖尿病、高血圧、脂質異常症、そしてロコモシンドローム、脂肪肝、NASH、NAFLDなど肥満に関連する多くの疾患をも含めた領域の疫学、病態、治療を中心とした古典的な肥満研究に加えて、最近の脂肪細胞の機能や形態におけるアディポネクチン、レプチン、TNF- α 、アンジオテンシノーゲン、IL-6、レジスチンなどアディポサイトカインや分子生物学的解析によるニューウェーブともいべき研究が急激に充実してきている。さらには分子疫学など古典的研究に新しい手法による研究が結合した研究分野が形成されるようになり、まさに肥満研究は、肥満学会を中心に糖尿病、高血圧、脂質異常症、そして循環器疾患に至るまで広汎な関連学会で追求されてきている。科学的にも最も進展し、期待の大きく広がっている研究・臨床分野である。

一方で、肥満対策においても大きな変化が出てきている。2005年4月に本邦のメタボリックシンドロームの診断基準が松澤理事長を中心に8学会から提唱されたが、本邦の臨床診断基準では腹部肥満が必須条項になっている。国際糖尿病連合(IDF)と同様の概念であるが、世界に先駆けた腹部肥満を上流とする代謝-心血管疾患の疾患カスケードの新しい考え方といえよう。肥満、特に腹部肥満を病態の中心とするこのメタボリックシンドロームの考えは、まさに肥満研究の集大成ともいえるものと思われる。さらにこの概念を用いて2008年4月より開始された特定健診・特定保健指導も肥満に関する大きなターニングポイントとなっている。健康日本21の主要なテーマである生活習慣病対策において、従来の自治体が行ってきた基本健康診査のみでは、肥満、歩数、朝食抜きの中高生、ストレスなどの実態は全く改善されず、むしろ悪化してきていることが明らかにされた。そして、生活習慣を改善するには健診のみでは困難で、保健指導が必須との考えから、厚生労働省の新しい取り組みとして、特定健診・特定保健指導が開始されたわけである。腹部肥満の改善を第一義にして、日本全体で国の政策として肥満対策に取り組むことになった点は、肥満学会-肥満研究においても大きな意義を有し、本邦の生活習慣病対策、肥満対策で大きな変革点と思われる。そして、肥満学会-肥満研究のオピニオンリーダーとしての重要な役割がここに存在する。肥満学会の大きな社会的責任として、真摯に取り組まなければならない課題である。

「肥満研究」は肥満学会の機関誌であり、このように大きな意義をもつ肥満の研究の公表の場である。コメディカルから医師、基礎研究者まで広いジャンルで優れた成果が発表されることを期待する。